

彙報

三人の日本学者の逝去

— エリセーエフ・ムッチョーリ・アグノーエル —

榎 一 雄

一

一九七五年から一九七六年にかけて、ヨーロッパとアメリカとは新しい日本研究の世紀を拓いた三人の学者を相次いで喪った。その三人がエリセーエフ (Сергей Григорьевич Ерицев, Serge Elisceff, 1889. 1. 13-1975. 4. 13) とムッチョーリ (Marcello Muccioli, 1898. 2. 1 -1976. 8. 8) とアグノーエル (Charles Hagnenauer, 1896-1976. 12. 24) であることは言うまでもない。

この中、エリセーエフ氏は帝政ロシアの首都サンクトペテルブルグ (一九一五年ペテログラード、更に一九二四年レニングラードと改名) の大富豪の次男として生まれ、同市にあったエカテリナ二世 (在位1762-1796) の創設したラリンスキー (Larinsky) 学院で初等・中等教育を受け、十五歳の時起った日露戦争 (1904-1905) に刺激せられて日本研究に

志し、ベルリン大学の東洋語学校 (Seminar für Orientalische Sprachen) を経て、明治四十一年 (1908) 東京帝国大学文科国文学科に入学、明治四十五年 (1912) 優秀な成績で卒業した。卒業論文は「芭蕉研究の一片」。外国人で日本の帝国大学の正規の課程を終了した最初の人である。引き続き大学院に進んで、芭蕉に関する研究を継続、学位請求論文の作成に備え、大正三年 (1914)、あしかけ七年の留学を終えて帰国、大正五年、六年にも来日して研究の完成に努めた。

この日本滞在中に学界・文壇・芸能界の多くの人々と親交を結び、日本を単なる知識として捉えるのではなく、日本そのものを極めて広く、そして深く、自身の一部として体得吸収したことは、前後にこれに比すべき人を見ない。

一九一五年四月と十二月にペテログラード大学で博士課程への資格試験に合格、一九一六年一月、同大学の日本語の私講師 (Правитель) に任命せられ、ロシアにおける新進気鋭の日本学者として花々しい活動を開始した。この時勃発したのが革命である。一九二〇年の春、ペテログラード大学の東洋語学部は文献学及び歴史学部と合併せられ、エリセーエフ氏はその事務を担当し、ポリシエヴィークの圧力に抗して大学を護ったが、この改革で私講師制度は廃止され、氏は助教教授に任命せられた。

これより先、一九一九年五月二十七日、氏は逮捕せられ、六月六日までの十日間を獄中に過したが、幸に銃殺を免かれて釈放せられた。こうした恐怖政治と極度の食料や燃料の不足による生活の窮迫に、終に国外脱出を決意し、一九二〇年九月二三日、妻及び二児とともにフィンランドに逃れた。この間の事情は氏自身の手になる日本語の記録「赤露の人情日記」(大正十年一月、大阪朝日新聞社刊、昭和五十一年十一月、中央公論社刊、中公文庫)に詳しい。

氏はフィンランドからストックホルムに移り、一九二一年二月、更にパリに転じ、ここに永住を決意してフランスに帰化(一九三一年)、その名を *Serge Eliseeff* と改めた。その間、ギメ博物館、パリ大学及びその東洋現代語学校、高等研究院に教え、一九三二年、高等研究院の教授に任命された。氏は一九三二年、ハーヴァード大学に出講、一九三三年、一度パリに帰り、一九三四年、ハーヴァード大学に新設されたハーヴァード―燕京研究所(Harvard-Yenching Institute)所長及び同大学東洋諸言語教授として米国に移り、一九五七年六月、職を辞してパリに帰るまで、二十四年に亘って米国に滞在した。この中一九二一年から三三年までのパリ在住の時代即ち三十二歳から四十三歳に及ぶ時期には五十を超える論著を公にしている。それは氏の全論著の半に近い量であって、その頃の氏の活動振りを窺わせるものである。

ハーヴァード―燕京研究所長には始めペリオ氏が擬せられたが、氏はこれを辞退し、エリセーエフ氏を推し、その結果エリセーエフ氏は合計二十五年に近い期間をハーヴァード大学で過し、多方面の新しい研究や新しいカリキュラムによる授業を行い、多くの専門学者を養成し、「米国における極東研究の父」(Father of Far Eastern Studies in the United States)(一九五七年、エリセーエフのハーヴァード大学教授辞任に際して氏に捧げられた記念論文集の巻頭を飾ったラインシャワー氏の「英利世夫先生小伝」の中の言葉。Harvard Journal of Asiatic Studies, Vol. 20, Nos. 1 and 2, June, 1957, p. 4 参照)と呼ばれるに至ったのである。氏のハーヴァード大学行きは、ペリオ氏の「まあ、いいからハーヴァードに行ってくれ。君が行かんと、ドイツ人が入り込むかも知れないので、それはよくないからなあ」という意見と、「うんとカネがとれるからいいじゃありませんか」との一言で決心したものであるというが(倉田保雄氏「エリセーエフの生涯」、東京、中央公論社、昭和五十二年四月刊、中公新書、一六六一―一六七頁)、私はドイツ軍がパリを占領した時、かねてその盛名を耳にしていたペリオに敬意を表すべくこれを招待したところ、「自分は今喪に服しているのだ」とこれを拒絶したという話(一九五二年十二月、ドミニクヴィニ氏から聞く所)を想起するのである。フランスの支那学の代表者

を以て任ずるペリオにしてみれば、ハーヴァードの要請には応じるわけには行かなかつたであろう。いづれにしてもエリセーエフ氏の赴任は、アメリカに新しい東アジア研究の開幕を齎したものであった。

こうして、ハーヴァード＝燕京研究所長たること二十二年（一九三四—一九五六）、ハーヴァード大学極東言語学教授たること二十三年（一九三四—一九五七）、ハーヴァード大学極東言語学部長たること二十年（一九三六—一九五六）、赫々たる実績を残して、一九五七年、パリに帰った。そしてパリ大学高等研究院 (École pratique des hautes études) で江戸文学を講じていたが、一九六二年、リューマチのため高等研究院を事実上退職、一九七五年（昭和五十年）四月十三日、八十六歳の生涯を閉じた。その前年（一九七四）、国際交流基金から日仏文化の交流への貢献に対し、基金賞が贈られたことは、我等の記憶になお新しいところである。

日本及び日本語に関する氏の知見が群を抜いていたこと、その日本文学についての研究が日本人学者の業績と肩を並べるに足ることは、既に多くの人々によって論ぜられている。

氏の伝記と学績を伝えたものとしては、右に引用したライシヤワー氏の *Serge Elisséeff* (英利世夫先生小伝) とその附録の「エリセーエフ教授著作目録」とが最も依拠すべきものであ
る (HJAS, Vol. 20, Nos. 1 and 2, June, 1957, pp. 1-

35)。これを補うものに、これまた右に引いた倉田保雄氏の手になる「エリセーエフの生涯」がある。これはエリセーエフの東京帝国大学留学時代とハーヴァード大学を辞してパリに帰ってからの生活、詳細な年譜、日本語で発表せられたエリセーエフの著作の目録を始めとする参考文献の部分に特に参考になる。また羽田明氏による追悼録が東方学 (第五十一輯、昭和五十一年一月、一三四—一三七頁) に出ている。

なお、財団法人東洋文庫にとつても、氏は忘れ難い恩人の一人である。戦後、財政の不如意に苦しんでいた東洋文庫に対し、何回か多額な援助がハーヴァード＝燕京研究所財団から与えられたが、これは氏の配慮によるところ頗る多い。当時東洋文庫の理事長は細川護立氏（一九五一年から一九七〇年まで在任）であったが、エリセーエフ氏は大正十五年（一九二六）から翌昭和二年にかけて十八ヶ月ほどパリに滞在せられた細川氏と親しく往来した。氏の東洋文庫への暖かい配慮はこの因縁にもよるものようである。

二

ライシヤワー氏はエリセーエフ氏を「日本研究の分野における、完全に訓練された、最初の西洋人の学者」即ち「西洋における最初のプロフェッショナルな日本学者」と呼ぶことが出来ると言っている。エリセーエフ氏以前にも若干の日本

語の知識をもち、或いは何かの事情で日本と接触があったことから日本の歴史又は文化の或る部分の研究について貴重な成果を挙げた人が沢山あり、また外交官・宣教師・教師として長く日本に居住したことによって得た知識をもとに、極めて重要な学術的貢献をした、アマチュアと呼ぶべき一群の学者がいることは事実であるが、エリセーニフ氏こそは日本人の助手の協力をまたず、自らの力で、堂々と日本人学者に伍して日本の資料を取扱い、あらゆる分野について日本研究の水準を向上させた最初の西洋人であるというのである。正にその通りであろう。エリセーニフ氏は体質的にこそ魏源のいわゆる「一雙の瞳子、秋水を翳る」(魏源集、下冊七四〇頁)碧眼の人であったが、その日本学における造詣には日本人の日本学者に匹敵するものがあり、更にその欧洲の文学・芸術等についての深い、そして幅広い教養は、氏に日本人の日本学者では気のつかない観点から日本文化の特質を把握させる利点を与えていた。

これに対し、化学者として出発し、一九三八年、四十歳にしてナポリ東洋学校 (Istituto Universitario Orientale di Napoli) の教壇に立つて日本語を教え、日本文学を講じた夢蝶里ことマルチェロ・ムッチョーリ氏は、日本人河村芳枝講師(男性)を日本語教授の同僚とするのみならず、研究の面で常にその協力を仰いでいたことからしても、一見ライシヤ

ワー氏のいわゆるアマチュア一の日本学者の一人のように思われるかも知れない。しかし、一九三〇年、氏が初めて世に送った方丈記のイタリア語訳に、冒頭の「ゆく川の流れば絶えずして、しかもとの水にあらず、よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」を、

La corrente di fiume scorre senza interruzione, ma l'acqua non è mai la stessa. La schiuma che galleggia nei punti di ristagno ora svanisce, ora rinasce, ma non persiste mai lungamente.

と訳し、*corrente, fiume, interruzione* と *e, l'acqua, stessa* と *a, svanisce, rinasce, persiste, lungamente* とそれぞれ *scie, te* に終る言葉を連続させて、原文と韻を異にはするが、流れて行く水や激んでいる水に浮ぶ泡の動きを文章の上に伝えようと試みているところなど、決して凡手の能くするところではない。

ムッチョーリ氏は、一八九八年二月一日、ローマに生まれ、ヴィスコンティ高等学校 (Liceo Visconti) を卒業したが、その頃から日本語の学習に意欲を燃していた。ついでローマ大学の数学・物理・自然科学部に入り、召集せられて第一次大戦に歩兵将校として出征、捕虜となった。帰還して学生に戻り、一九二二年に化学部を卒業、その後いくつかの技術研

究所で化学を教えた。一九二七年に発表された柿の渋の成分と支那・日本におけるその利用との研究は、化学と日本学との知識の結合したものであろう。

氏の日本語学習がどのようにして行われたのか知るところが無いが、一九三〇年、三十二歳の時には既に方丈記の訳を出版していること、右の一言した通りである (Hōjōki di Kamano-Chōmei, Lanciano: G. Carabba, 1930, 94 pp. その改訂版が、一九六五年、つれづれ草の翻訳と合せて出版されている。それによると、一九三〇年版は内海弘蔵氏の方丈記評釈に基づいているという。私は一九六五年版しか見ていないので、右に引用した冒頭の部分が一九三〇年版と同じか否かを詳かにしない)。一九三五年、氏は(日本語及び日本文学を)大学で教える資格 (La Libera docenza) を獲得し、一九三八年から一九五五年までナポリ東洋学校 (Istituto Universitario Orientale di Napoli) の日本語・日本文学の講師、一九五五年同校の員外教授 (professore straordinario)、一九五八年、正教授 (professore ordinario) に昇進し、一九七三年、十一月年金受給者の列に入り (collocato in pensione)、一九七四年、名誉教授の称号を与えられ、「教育・文化・芸術の分野における顕著な功績に対する金メダル」(La "medaglia d'oro per i benemeriti della Scuola, della Cultura e dell'Arte") を授けられた。そして、一九七六

年八月八日の夜、ローマ西南方の漁港で、船遊びや釣の客で賑うアンツィオ (Anzio) で急逝した。そこに引退していたのか、避暑に来ていたのかは明かでない。

氏の目標が日本というものの全体的理解にあったことは、氏に「日本帝国」(L'Impero Giapponese, Roma: Cremonese, 1942, 192 pp.) の著のあることから察せられるが、その最も力を注いだのは日本文学の研究である。

ムッチョーリ氏には日本文学史の著が三つある。第一はトウッチェイ氏編の「東洋の文化、文学編」(一九五七年刊) に掲げたものである (Letteratura giapponese, In: Le Civiltà dell' Oriente, II, Letteratura, a cura di G. Tucci, Roma: Gherardo Casiri Editore, 1957, pp. 1043-1115)。第二はサンソーニニアカキム (Sansoni-Accademia) 書店から一九六九年二月に出た「世界の文学」(Le Letterature del Mondo) 叢書の一冊として出した「日本の文学」(La letteratura giapponese. La letteratura coreana. 12.5 × 19.8 cm. Firenze: G. C. Sansoni e Milano: Edizioni Accademia, 1969, 567 pp., pp. 5-428 per la letteratura giapponese) とある。第三は「東日文学史」(Storia delle Letterature d'Oriente, 4 Vols, Milano: Casa Editrice Dr. Francesco Vallardi e Società Editrice Libreria, 1969) の一冊 (Vol. 4, pp. 415-756) として一九六九年十月に出されたものである。こ

これらの三つ、特に第二と第三とは叙述の繁簡、引用の作品例等についての相違はあるが、構成も説こうとしていることも全く同じである。氏が何故同じようなものを繰返し出したのか判らないが、出来れば、その中の一つを日本文学の全体に通ずるいくつかの特質の説明、例えば芳賀矢一博士の国文学十講とか久松潜一博士の *The Vocabulary of Japanese Literary Aesthetics*, Tokyo: Center for East Asian Cultural Studies, 1963 のようなものにしたなら、一層面白かったであろう。ましてムッチョーリ氏自身も第三の序文の中に、「本書は何よりもまずアジアの最も進歩している国民の魂と精神とを理解する一助としてのささやかな寄与である。この古い大陸〔アジア〕が西洋の圧迫を脱して現代世界の歴史に積極的に進出している今の時点において、自分が本書を書いたことは、イタリア人、少くともイタリアと極東の諸国との関係の将来に思を致す人々にとって、意味なしとしないであろう」(四一八頁)と言っているのを読むと、そうした内容の書物の出現しなかったことが一層惜まれる。いくつかの記録や著作から適当と思われる部分を抽出し羅列して、日本人の精神史の発展を述べつける試みは、欧州ではメンルとハミッチ、米国では角田柳作・デハーリー・キーン氏等によつて行われていたが (Oskar Benl u. Horst Hammitzsch: *Japanische Geisteswelt, vom Mithus zum Gegenwart, Baden*

den Baden, 1957, 419 S.; Ryusaku Tsunoda, Wm. Theodor de Bary and Donald Keene: Sources of the Japanese Tradition, New York: Columbia University Press, 1938, xxvi+928 pp.)、そうした資料自身をして語りしめるのではなく、ムッチョーリ氏自身の研究によつて整理された日本文化論を得たかったものである。

日本文学史を氏の日本文学についての概論であるとすれば、その特論に当るものが二つある。第一は古代から近世に及ぶ多くの作品の解説と翻訳とである。それには方丈記・徒然草・百人一首・腰越状等、単行本として或いは記念論文集への寄稿として世に送られているもののはか、次の日本演劇史の附録である作品選集に収められているものを挙げる事が出来る。第二がこの日本演劇史であつて、氏の日本文学関係の研究を代表するものである。

氏は一九五六年と一九六〇―六一年の二回来日、それぞれ六箇月・約一箇年滞在し、日本演劇史に関する材料を蒐集した。第二回の来日に際しては、東京と京都とで講演した。東京では、昭和三十六年(一九六二)六月二十一日、東洋文庫の東洋学講座で「日本研究の二人の先駆者アンテルモセリニ (Carlo Valenziani)」の学績について語った。その概要は昭和三十六年度の東洋文庫年報に掲げられている。日本政府は

氏の日伊文化の交流に対する功績を重視し、昭和三十五年（一九六〇）年七月八日、勲三等瑞宝章を贈って、これを表彰した。

こうして蒐集せられた材料を中心に書上げられたのが、日本演劇史という漢字の題名をも併記した *Il teatro giapponese. Storia e antologia*, Milano: Feltrinelli Editore, 14.5 × 22 cm., 661 pp. Con 12 illustrazioni nel testo e 32 in bianco e nero e VIII a colori fuori testo の大作である。本文 (pp. 19-329) は章を分つて四部。第一部は「演劇の先駆」、第二部は「古典演劇(能・狂言)」、第三部は「民衆の演劇(歌舞伎・浄瑠璃)」、第四部で「日本開国以後の演劇」について述べ、それらに対する注記 (pp. 331-343) と第五部をなす「資料編」(*Antologia*) (pp. 344-561) とその注記 (pp. 565-593) とがこれに続き、最後に書誌・年表・浄瑠璃流派表・索引・目録が附載されている。資料編には延年舞・田楽の能、能・狂言・浄瑠璃・歌舞伎から十五篇が選ばれ、その全部又は一部が訳出されているが、狂言篇の十五篇が下位春吉氏等三氏訳の「狂言十五番」(Kyōgen, *XV farse antiche giapponesi*, Napoli, 1922) にあつたもの若干訂正を施して採録したものである以外、すべてムッチョーリ氏自身による訳である。

その序文や書誌から明かなように、本書はこれまでに出版

欧米学者と日本人学者との研究の成果を併せ、更にこれを自身の調査・見聞によって補つたもので、古代から一九五〇年代のいわゆる新歌舞伎に至る日本演劇史の流れを大観している意味において、この方面の代表的通史の一つであり、イタリアの日本研究を代表する力作の一つといつべきである。ムッチョーリ氏には日本歴史関係の論著もいくつがある。その代表的なものは、一九六三年、ヘルネスト・ポンテ・エリ編の世界史に寄稿した「日本の歴史」(*Storia del Giappone [dalla Storia universale diretta da Ernesto Pontieri]*, Milano: Casa Editrice Dr. Francesco Vallardi, 1963, pp. 335-571) であるが、率直に言つて余にも簡単であり、無味である。著者独特の見方とか主張とかは全く見られない。しかし、残念ながらイタリア人の書いた日本史にはこれに優るもの、と言ふよりも、これ以外にないのである。イタリアにおける日本史研究で僅かに気を吐いているのは、数は少ないがイェズス会士によるキリスト教流入時代の日本史の研究であるが、それに匹敵すべき他の時代の歴史は皆無であると言つてよい。

日本について、このほか神道の概説 *Il Shintoismo, la religione nazionale del Giappone*, Milano: Galileo, 1949, 147 pp. e 2 tavoli: *Shintoismo, con una appendice sulla religione degli Ainu*. In: *Le Civiltà*

dell' Oriente, III, Roma: Gherardo Casini Editore, 1938, pp. 1101-1146) 日本科学史 (Scienze del Giappone, In: Le Civiltà dell' Oriente, III, pp. 1147-1179. 医学・薬学・数学・地理学・博物学・天文学・経験科学・法律学を扱ってゐる) があつたか、ヒュースマン教授編の「世界の人種と民族」の一部をなす極東の現住民についての概説がある (Popoli Civili dell' Estremo Oriente, In: R. Biasutti, Razze e popoli della terra, II, Torino: Union Tipografico-Editore Torinese, 1941, pp. 605-638 (2a ed., 1954, pp. 521-557: 3a ed., 1959, pp. 521-557)。氏には朝鮮史・朝鮮文学史と支那學術史・支那地理学史とに關する概説と論文とがある。朝鮮關係の記事は日本人學者の論著を踏へつてのものが多く、氏獨特の見解を期待すべきものだが、支那略の支那地圖 (Il mappamondo cinese del Padre Giuio Aleni S. J., in collaborazione con Gius. Caraci, In: Bollettino della Società Geografica Italiana, VII, 3, 1938, pp. 385-426) やマニレンツキ国立中央図書館所蔵の広輿考 (初版本) についての研究 (Sull' atlante cinese della Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze, In: Istituto di Napoli, Annali, 29 (N. S. 19), 1969, pp. 397-410, Tav. I-X: Ancora sull' atlante cinese della Biblioteca Nazionale di Firenze, In: *Ibid.*, 30, 1970, pp. 239-248) は参照すべきである。

ある。こうした日本・朝鮮・支那についての氏の造詣は、その筆に成るイタリア大百科辞典 (*Enciclopedia Italiana*) の極東關係の多くの項目の解説によつて示されてゐる。

ナポリ大学での、更に広く言つて、イタリアでの氏の後継者は誰であるのか。また日本學研究の現状はどうであるのか。ローマの中東亞研究所の定期刊行物の一つである「日本」(Il Giappone) が僅かにイタリアにおいて日本の新しい發展を伝へてゐるといふこと以外に、記すべき情報を有たないことを遺憾とするが、庶幾くは、続々と優れた後継者が出て、ムッチェーリ氏の業績を發展せしめられんことを。

ムッチェーリ氏の略歴は、リカルディ氏の手になる計報に拠つた (Riccardo Riccardi, Marcello Muccioli, in: Bollettino della Società Geografica Italiana, Serie X, Vol. V, 1976, pp. 533-534)。次に知り得た限りの氏の著作を年代順に列挙する。本文に言及したものが、重複を厭わず、敢えて羅列する。氏には二十に近き書評があるが、これは敢えて省略した。その多くは今のナポリ大学の東洋研究所の年報に出づゝる。*印は筆者未見のものである。

1927

*Sul succo astringente del frutto del "Diospyros kaki" acerbo e le sue applicazioni in Cina ed in

- Giappone come sostanza impregnante per la carta ed il legno, Roma : G. Bardi, 1927, in-4 (=In : Rendiconti d. Real Accademia Nazionale dei Lincei, Cl. d. Sc. fis., mat. e natur., Serie 6, t. V, 1927, pp. 922-924.
- Intorno ad una erronea conclusione di A. E. Norden-skiöld contenuta nel "Periplus", Bollettino della Società Geografica Italiana, 1927, pp. 379-382 e 2 tavoli. [指南車と磁石の発明とについて]
- 1930
- *Hōjōki di Kamo-no-Chōmei, Lanciano : Casa Editrice G. Carabba, 1930, 94 pp.
- 1937
- Alcune osservazioni geografiche sulle isole Ryūkyū, Bollettino della Società Geografica Italiana, 1937, pp. 433-440.
- 1938
- Il mappamondo cinese del Padre Giulio Aleni S. J., (in collaborazione con G. Caraci), Bollettino della Società Geografica Italiana, 1938, pp. 385-426.
- *Il ti [tè?] in Giappone, VDM [Veduta del Mondo?] VI, 1938, pp. 208-218
- 1941
- I popoli civili dell' Estremo Oriente, In : R. Biasutti, Razze e popoli della terra, Vol. II, Torino : Union Tipografico-Editore Torinese, 1941, pp. 605-638 ; 2 a ed., Vol. II, 1954, pp. 521-557 : 3 a ed., 1959, pp. 521-557.
- 1942
- *Corso di letture giapponesi, Vol. I, (in collaborazione con Y. Kawamura), Napoli : Istituto Universitario Orientale, 1942
- *L'Imperio Giapponese, Roma : Cremonese, 1942, 192 pp.
- 1949
- Le condizioni economiche della Corea sotto il dominio giapponese, Bollettino della Società Geografica Italiana, 1949, pp. 136-152.
- *Lo Shintoismo, la religione nazionale del Giappone, Milano : Galileo, 1949, 147 pp. e 2 tavoli.
- 1950
- *La cintura poetica di Fujiwara Teika (1162-1241) (Hyaku-nin Is-shu, Traduzione dal giapponese, introduzione e commento, Firenze : Sansoni, 1950,

- XXXXIV+82 pp. e 1 tav.
 1951 Japanese Studies in Italy, East and West, II, 1951-52, pp. 9-12.
- 1952 Il "Nō" di Tomoe (E), Istituto Universitario Orientale, Annali, N. S. Vol. IV, 1952, pp. 155-197.
- 1953 Il "Nō" di Shunkwan, Istituto Universitario Orientale, Annali, N. S. Vol. V, 1953, pp. 189-252.
- 1956 Corea e Giappone, In: Le Civiltà dell' Oriente, I, Storia, Roma: Gherardo Casini Editore, 1956, pp. 1143-1238.
- Inauguration of Father Sidotti's Memorial Stone in Tokyo, East and West, VII, 1956, pp. 265-266.
- 1957 Letteratura giapponese, In: Le Civiltà dell' Oriente, II, Roma: Gherardo Casini Editore, 1957, pp. 1043-1115.
- Chinese Literature in Japan from the VII to the IX century, East and West, VIII, 1957, pp. 275-280.
- 1958 La letteratura cinese in Giappone dal VII al IX secolo, Cina, II, 1957, pp. 34-45.
- 1958 Scienze della Cina, In: Le Civiltà dell' Oriente, III, Roma: Gherardo Casini Editore, 1958, pp. 1035-1080.
- Shitoismo, con una appendice sulla religione degli Ainu, *Ibid.*, pp. 1101-1146.
- 1963 Scienze del Giappone, *Ibid.*, pp. 1147-1179.
- 1963 Storia del Giappone, In: Storia universale diretta da Ernesto Pontieri, Milano: Casa Editrice Dr. Francesco Vallardi, 1963, pp. 335-571.
- 1965 Kenko Hoshi: Ore d'ozio (Tsurezure-gusa). Kamonochomei: Ricordi della mia capanna a cura di Marcello Muccioli. (Scrittori d'Oriente, 5). Bari: Leonardo da Vinci editrice, 1965, 273 pp. Con 12 illustrazioni, 2 in bianco e nero e 10 a colori.
- 1962 Il teatro giapponese. Storia e antologia, Milano: Feltrinelli Editore, 661 pp. con 12 illustrazioni nel testo e 32 in bianco e nero e VIII a colori fuori testo.

RC: P. Lorenzini in *Annali*, X (Istituto Universitario Orientale di Napoli), pp. 160-163.

1969

Sull'atlante cinese della Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze, In: Istituto di Napoli, *Annali*, 29 (N. S. 19), 1969, pp. 397-410, Tavola 1-X.

La letteratura giapponese. La letteratura coreana. Firenze: G. C. Sansone e Milano: Edizioni Accademia, 1969, 567 pp.

Letteratura giapponese. In: Storia delle letterature d'Oriente, diretta da Oscar Botto, Vol. 4, pp. 415-756. Milano: Casa Editrice Dr. Francesco Vallardi e Società Editrice Libreria, 1969, (Estratto con Indice de nomi e Tabelle dei caratteri cinesi corrispondenti ai nomi dell'Indice, 1969)

Su una lettera di Hideyoshi del 1593 al Governatore delle Filippine trovata nella Biblioteca Marciana, In: Istituto Universitario Orientale di Napoli, *Annali*, 29 (N. S. 19), 1969, pp. 569-574 con 1 Tav.

1970

Ancora sull'atlante cinese della Biblioteca Nazionale di Firenze, Istituto Orientale di Napoli, *Annali*, 30,

1970, pp. 239-248.

*Storia di Corea e di Giappone, In: Nuova Storia Universale dei Popoli e delle Civiltà, XX, Torino, 1970, pp. 307-677.

1972

Ancora su una lettera di Hideyoshi del 1593 al Governatore delle Filippine trovata nella Biblioteca Marciana, In: Istituto Orientale di Napoli, *Annali* 32 (N. S. 22), 1972, pp. 103-110.

1974

La lettera di Koshigoe (Koshigoe-jō), In: Gururūya-manjikā, Studi in onore di Giuseppe Tucci, II, Napoli: Istituto Universitario Orientale, 1974, pp. 699-708, Tav. CLXXXIV-CLXXXVI.

三

一九七七年一月十日の消印で、未亡人・令息夫妻・令孫の名でマツノエール氏逝去の通知を頂じた。逝去は一九七六年十二月二十四日。マツノエール氏の肩書は「ソルボンヌ大学名誉教授、高等研究院指導教官、元パリ大学朝鮮研究センター兼び日本高等研究所長」(Professeur honoraire à la Sorbonne, Directeur d'Études à l'école pratique des

Hautes Études, Ancien directeur du centre d'Études Coréennes et de l'Institut des Hautes Études japonaises de l'Université de Paris) とあり、この「ルビヨウ先」一月四日のルビヨウ紙で門下の代表として、ベネチアンナー・ルビヨウ氏 (Bernard Frank, Directeur d'études à l'École pratique des hautes études) の追悼録「フランスにおける日本及び朝鮮研究の指導者シャルル・ブゾノール」の逝去 (Mort de Charles Haguenaer, Le maître des études japonaises et coréennes en France) が掲載された。その後、シャルル・ルビヨウ・ブゾノールの一九七七年三・四合併号に同じく門下のユライユ女史による「シャルル・ブゾノール」(Francine Hérail, Charles Haguenaer, Journal Asiatique, CCLXV, 3/4, 1977, pp. 213-219) が出た。ブゾノールも新しい日本学の創始者としての故人の学績を讃えたものである。そしてこれら二つの追悼録の中間に氏の代表的業績を輯録した四冊の論文集が世に送り出された。この論文集は本来八十歳の誕生日 (一九七六年十月二十九日) を記念すべく編集が進められたものであるが、フランク氏の記すところによると、僅かに第一冊の校正刷をその病床に届けることが出来たのであるという。第一、二冊が日本篇、第三冊が琉球・台湾篇、第四冊が朝鮮篇で、第二冊は日本語に関する九篇の論考を、第二冊は日本の宗教・歴史・文学に関する二十の論文・

書評・翻訳、一九三四年から一九六七年に至る各年度の講義の要録 (Comptes-rendus de Conférences tenues à l'École pratique des Hautes Études, Section des Sciences Religieuses) を戴せ、第三冊は琉球・台湾の歴史と民族とに関する論考九篇を、これらも発表された原誌を復写して編集してある。第四冊朝鮮篇は本稿執筆までには見ることが出来なかった。その総題を「ブゾノール選集」とする (Études choisies de Charles Haguenaer, éditées par Paul Akamatsu, Madeleine David, Pierre Faure, Bernard Frank, Francine Hérail, Jacqueline Pigeot, et Hartmut O. Rothermund, Vol. I, Japon, Études de linguistique, (6) + 423 pp. avec un portrait de l'auteur, Leiden : E. J. Brill, 1976. : Vol. II, Japon, Études de religion, d'histoire et de littérature, (9) + 438, 1977) : Vol. III, Les Ryūkyū et Formose, Études historiques et ethnographiques, (4) + 195, avec 3 cartes, 1977)。

ブゾノール氏はフランスの人。一八九六年の生れであるが、その生地や生家のごとは詳かでない。ケーン (Caen) の高等学校に学んだ頃から言語特に日本語に興味を有し、パリ大学ではハリオ・グラネ・マスマロの指導を受け、メイユ・モスの講義を聴いた。ハリオ (Paul Pelliot, 1878-1945) ・マスマロ (Henri Maspero, 1883-1945) は支那学者、グラ

ネはフランス社会学の創設者の一人デュルケム (Emile Durkheim, 1858-1917) の流を汲む学者で、古代支那を社会的に研究した人、メイエ (Antoine Meillet, 1866-1936) は印欧比較言語学の大家、マヌス (Marcel Mauss, 1872-1950) はリヴエ (Paul Rivet) とともに民族学研究所を創設した人である。こうした顔触れを見ると、後年のアグノーエル氏の言語・民族・社会・歴史等多くの角度から日本の文化を分析し、その結果の総合の上に立って、その性格の全体としての特色を掴もうとした学風の由って来るところが知られるであろう。

一九二四年、アグノーエル氏は日本に来て、一九二五年に設立された日仏会館の留学生 (pensionnaire) 第一号となり、一九三二年まで八年滞在し、傍、東京外国語学校に教え、アヴァス (Havas) 通信社の特派員として活躍した。現代の文化を古代文化の最も新しい段階として理解する氏にとっては、通信社の特派員として取材し、通信を送ることは、これ亦日本文化の総合的理解を助けるためのこの上ない好い仕事であったであろう。東洋文庫のために欧文紀要 (六六) に載せる羽田亨博士の「吐魯番出土回鶻文摩尼教徒祈願文の断簡」と、石田幹之助氏の「胡旋舞考」とを仏訳したり、吉沢義則氏の濁点の起源に関する論文を訳したり (Journal Asiatique, 1927, pp. 193-231) したのもこの時である。

そしてフランスに帰ると、国立東洋現代語学校の日本語教

授として教え、週一回高等研究院の宗教学科で日本の宗教について講義し、一九四〇年、同学院の極東宗教史の指導教官に任じ、一九五三年、現代語学校を辞して、ソルボンヌに氏のために新設せられた日本語日本文化講座の教授となり、一九六九年、定年退官の時に至るまで多くの学生を教えた。

エライユ女史の記す所によると、教室でのア氏は自己の權威にかけて軽率な結論を押しつけようとしたり、よい加減な一般化を試みたりすることはなかった、飽くまでも綿密に、飽くまでも細心に議論を推進め、徹底的に正確を期した人であったという。氏の研究の目標は、前にも一言した如く、日本文化とは何かを明かにすることであった。日本語・日本文学、日本の宗教・信仰・迷信、民間の行事・民話、日本の歴史、先史時代の遺蹟の物語るもの、そうした一切を打って一丸としたものから、日本文化の本質を解明して行くことであった。氏は単なる日本語・日本文学の研究者でもなければ、民間信仰の追究者でもなかった。日本に関するあらゆるものに体当りして、そのすべてから日本文化の特質を汲取って行くこととした人である。日本内地は勿論、琉球・朝鮮等を非常に広く旅行したことも他の学者には見られない特色である。エライユ女史はア氏こそフランスにおける真の日本研究の創設者であると評しているが、私はフランスのみならず、全世界でも氏のような態度で日本文化 (正しくは日本文明) と言うべ

きであらう)の解明に立向った人は類い稀であると考ええる。

氏の大きな功績の一つに日本人学者の業績の紹介がある。

そのいくつかは選集にも収められているが、その中の日本史関係のものや東洋文庫の出版物の紹介 (Revue historique の一九五九、六〇年に出たもの)に和田清博士の東亜史研究や満文老檔や歐文紀要が取上げられているのは、東アジアに關するものであるからまずよいとして、高橋幸八郎氏のフランス史関係の日本語の著書までが論評されているのを見ると、多少意外の感なきを得ない。一九五二年十二月、パリの住居に氏を訪問した時、氏は最近これを読んで紹介しましたと高橋氏の著書を示された。見ると三百頁ほどの書物の殆ど毎頁に鉛筆で一面の書入れがしてあって、氏がその理解に如何に苦心したかがよく判った。その時はこうした書物まで読破紹介される理由を知るのに困しんだが、その後氏のいくつかの論著に親しむに及んで、それが日本と日本人とをあらゆる方面についてあらゆる角度から認識しようとする氏の意気込みと努力との現れであることに思い至って、心から敬服した。氏は一見甚だ頑固な人で、こうと決めたら容易にその考えを変えない、自分の要求は断じて撤回しない人のように見えたが、それは頑固というよりは飽く迄も生真面目な氏の性格によるものようである。氏の書齋や研究室を見る機会はなかったで、氏の蔵書については知らないが、恐らく頗る多

面に互る書物を集めていたのであらう。そしてそのすべてを一字一句苟くも忽せにすることなく読んでいたのであらう。

一九五六年、氏の研究の集大成ともいふべき「日本文明の起源」(Origines de la civilization japonaise. Introduction à l'étude de la préhistoire du Japon, Première partie, Paris: Imprimerie Nationale, 1956, 21×27 cm. XV+640 pp.)の第一冊が刊行せられた。氏は人類学者 (anthropologue)・民族学者 (ethnologue)・言語学者 (linguiste)・考古学者 (archéologue)の立場から日本文明の起源を追究し、最後にそれらを総合して結論を出す予定であった。第一冊には人類学・民族学の専門家の見解を列挙し、言語学者の見解としては、全書の四分の三に近い頁を投入して、日本語をその周辺の諸言語と比較し、アルタイ語系の諸言語との関連が最も濃厚であるとしながらも、アルタイ語系であるとは断定出来る段階にまでは至っていないことを正直に述べている。(この言語の部分については、服部四郎博士の言及を参照せよ。「日本語の系統」東京、岩波書店、昭和五二年二月、第十一版、一八三—一九〇頁。アグノーエル氏の最後の著書は日本語とアルタイ語との新しい比較研究であるが、本稿執筆までには見るを得なかった)。考古学者の立場からする日本文明の起源論と全体の結論とは、第二冊に発表される筈であったが、遂に完成に至らなかつたようである。

選集に入らなかつた単行本としては、この「日本文明の起源」第一冊のほかは、「日本現代語の語態」(Morphologie du japonais moderne, Paris: Klincksieck, 1951)・「源氏物語」序論と巻一の翻訳」(Genjimonogatari, introduction et traduction du livre I, Bibliothèque de l'Institut des hautes études chinoises, XII, Paris: Presses universitaires de France, 1959, 87 pp.)・「日本語とムルタイ語との新しく比較研究」(Nouvelles recherches comparées sur le japonais et les langues altaïques, Paris: Asiatèque, 1977)がある。この中、源氏物語についての序論は小沢正夫・長谷川太郎氏によるその主要部の日本語訳が「文学語学」(第三十七巻、東京、昭和四十年、八五―九八頁)に出

され、「選集」第二冊に収められている。十一世紀初頭の宮廷の文学としての源氏物語の本質が、物心共に型に嵌った、他人の迷惑のみを気にしなければならなかつた世界に閉じ込められていた女性達に、空想の上だけでもそうした世界から飛び出す舞台を与えるためのものであったとする議論は、小説というものの本質から考えれば、当然のことと言えようが、ほかでは余り聞いたことのない意見である。なお、「日本古典を語る」という氏と小沢正夫氏との対談(昭和四十五年十月三十日)が小学館の日本古典文学全集第七卷(古今和歌集)の月報に出ている、日本の文学に対する氏の考え方の一端を窺わしめるものがある。